

2019 年度「豊岡市地方創生戦略会議」 会議録（要旨）

- 開催日時 2019 年 6 月 10 日（月）午後 1 時 30 分～午後 4 時
- 開催場所 豊岡市役所 3 階 庁議室
- 出席委員 中貝座長、中嶋副座長、平田委員、岡本委員、朝倉委員、
太田委員、佐伯委員、永田委員、西垣委員、高宮委員、宮崎委員、
木村委員、西池委員
- 欠席委員 嶋委員、村瀬委員、尾崎委員、橋本委員
- 傍 聴 14 名

1 開会

2 中貝座長（市長）あいさつ

豊岡市の地方創生戦略は、圧倒的な社会減と 10 代で失われた人口を 20 代でどれだけ取り戻すか、若者回復率をどう上げるかについて力を注いでまいりました。途中から、男性は上がってきているのですが、女性はむしろマイナスとなっており、男性の半分しか回復率がない、このことに非常に強く危機感を持ち、若者回復率とその中でも女性の回復率をどう上げていくかについて、かなりの力を注いでいるのが今の実態です。

同時に、なぜこんなにも帰ってこないのか、それは、地方は貧しくてつまらない、というイメージの中にあると総括し、それならば、貧しくなくて、面白い、そんなまちをつくろうと戦略を進めてまいりました。

相当大がかりで長期的な仕掛けも作りました。スタート当初には考えてもみなかった専門職大学の誘致や、平田さんが豊岡に移り住むと言われるなど、相当な追い風が吹いてきたと感じております。

他方で、5 年刻みの国勢調査では直近のデータがなく、住基ベースでしか見ることができないのですが、昨年あたりは特に大都市の企業の採用意欲が非常に強く、このあおりを受けて、以前なら豊岡で就職した人たちが他に取り残られてしまうのではないかと危惧していたのですが、それが昨年の数字で見ると、かなり厳しい状況となっています。これは一時的なものなのか、恒常的なものか、少し時間をかけてみないとわかりませんが、私たちは強い危機感を持っています。

なお、大がかりな仕掛けの部分と、今現にどこかに移り住もうと思っている人たちがいるので、その人たちを巧みに取り込んでいく短期的な政策をバランスよくやっていく必要があると考えております。

以上の反省も踏まえながら、次の戦略についても、皆さんのお知恵をお借りしながら作っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

2 議事

(1) 地方創生総合戦略第4版の進捗状況について

政策調整課と健康増進課から資料1、資料2、資料3、資料3-1、資料4に基づき説明

副座長から、人口動態について、当日配付資料5に基づき説明

・副座長 戦略の効果を人口統計から確認するために、いろいろと数字を積み重ねてきております。

まず、長期視野でみると、人口動態は、何十年もかけて見えてくるトレンドですので、数年間のアップダウンに一喜一憂しないようにしていただきたい。図表の1と2です。日本で国勢調査は1920年に初めて行われ、約100年経っていますが、その間、竹野地域や但東地域は1回も人口増加をしたことがない、100年間人口減少が続いている地域です。日高地域や出石地域、豊岡地域は、1947年・1948年・1949年の団塊の世代が生まれた直後が各旧市町のピークであり、そこから人口減少になっていますので、約70年間の人口減少の経験をもつ地域となります。

その70年間、あるいは100年間人口減少が続いていた地域に、5年間の計画の効力を与えることは、相当な挑戦であると認識いただいた上で、1年1年のアップダウンを見ていただきたいというのが最初の問題意識でもあります。そこに何かしら70年間、100年間のトレンドに少しでも変わっている兆しを一所懸命に探すのが私の宿題なのですが、なかなかその兆しが見えません。

それから、もう1つは、広域視野と書いていますが、豊岡市政として、例えば豊岡市がものすごくがんばったがゆえに、周囲の町の疲弊が加速し、その分の活力を吸収しているからこそ豊岡が伸びているのであれば、結局5年、10年後に吸収できるものが周囲の町に残っていなければ、豊岡が少なくなっていく可能性があるわけです。ですので、但馬地域や隣の鳥取県、京都府などの周辺の自治体の動きの中で豊岡がどうがんばっているのか、お互いが奪い合っていることはないか、無駄なリソースを費やしすぎているかを確認しながら、確実に豊岡の力を蓄えるという視点をぜひ持っていただきたい。長期で見ていただく、広域で見ていただく、その中で豊岡を捉えていただく。このことがまずお伝えしたいメッセージです。

そのうえで概要としていくつか書いていますが、結論からひと言で申し上げますと、まだ芽はなかなか見えてきておりません。

具体的な数字の動きについては、図表3をご覧ください。いちばん左側

のプランの実数値は、2010年、2015年の国勢調査の全数調査の数値です。2010年の人口は、85,000人、5年後は82,000人で約3,000人減っています。直近の2019年5月1日現在は、兵庫県の推計で78,000人まで減少しています。この創生会議がスタートしたときにどう捉えたのかは、右側にあります。この創生戦略会議と最も関わりが深いのは、市基準推計と市の政策目標推計です。市基準推計の2015年の数値は、もし何もせずに放っておいたらこうなるというシビアなトレンドで作成した推計です。それと比較すると、2019年は300人ほど多くなっています。それから、3つ目の市政策目標推計は、がんばって創生戦略を行った場合の目標値なのですが、78,630人に対して78,687人ですので、総人口は限りなく目標推計に近い数値になっています。

図表4のグラフで2018年の実績値は79,428人で市基準推計は79,223人、市政策目標推計は79,476人であり、この2つの推計に挟まれており、限りなく目標推計に近いラインにあります。

他に豊岡市の人口を推計している資料として、社人研（国立社会・人口問題研究所）が前回の創生戦略策定の際に、政府が使用していた数値があります。2013年3月の推計でしたが、2018年3月に改訂版が出ており、日本創生会議では、実数値の79,224人としたのですが、それに比べると少し実数値が上回って推移しています。

この総人口や他の指標でも概ね目標数値に近い状態で推移してきていますが、これは、今のところであり、少なくとも最初の5年間はということです。そもそも、最初の5年間は簡単に大きな成果が出るはずがなく、少しシビアに考え、後々に効果が表れるとすれば、このあたりかなという推計になっております。したがって、今、目標推計に沿っているからといってもこれから勝負だと捉えていただきたいと思います。

回復率については、8ページの図表15・16・17に記載しています。図表15と16が年齢別の移動率です。下に落ちているのが高校を卒業した時点で、上がっている所は、20代前半で卒業・就職で豊岡へ戻ってくる人たちです。この下に振れた面積と上に振れた面積の比率を回復率と定義し、お示ししています。

図表17では、1980年まで遡った回復率を計算しています。男女の比率は、1980年から1985年にかけて約3人に1人でした。現在は少し回復し、約4割です。男性は30%だったときもあり、90年代では、65%という時もありました。現在は52%で約2人に1人です。女性はずっと24%で、90年代に38~40%の時期もありましたが、今、また下がり27%です。

一貫して見えるトレンドとしては、男性側に大きく偏重していることで

す。もう1つ顕著に見えるのは、やはり景気に大きく左右されており、全体的に景気が悪ければ、豊岡に帰る雰囲気を読み取れ、景気がよくなると大都市に引っ張られます。ここ数年間、非常に景気が良く、大都市での採用が非常に盛んで、さらにその採用熱でもって人手不足の企業があります。今年は採用できなかったのも、翌年度に採用の積み増しをしているという噂も聞こえています。一昨年よりも去年、去年よりも今年と採用熱が増しているのも、さらに転出超過の傾向が顕著になってきていると思います。結局このパターンを崩さなければ、外部要因で吸収されます。そして、男性ばかりのまちを再生産することを繰り返し、そのことがさらに少子化と流出する女性を助長し、負のサイクルに入ります。このことは、重要なポイントです。

図表 18. 19. 20 で但馬地域における回復率と図表 21 の地域別純移動数を記載しています。確かに豊岡からの流出が多いですが、豊岡市は但馬地域の中核都市ですので、周辺地域から吸収をしている状況にあります。

国勢調査の間に、5年間の検証と5カ年計画の策定が入っているので、なんとかその間の5年間の成果を測れる方法を考えてくれというリクエストをいただいております。リソースとノウハウが蓄積されていないのですが、なんとかやり方を編み出したいと思います。もう少し時間を頂き、国勢調査の間の期間を上手に計りながら、短期・中期の目標にフィードバックし、そして、長期の視点と広域的な視点も忘れないようにしたいと思います。

座長 5年ごとの国勢調査は、豊岡市にいる実態の数字なのですが、住基データは住民票を置いたまま、大学に行っているなどの事情があり、不正確です。しかし、そこを押さえない限りは5年間で、どうなのか分かりませんので、その挑戦を先生にお願いしています。

ここまでのところで何かご質問、ご意見はございませんか。

委員A 2、3日前に朝来市の人口が増え、県内は豊岡などからの移住者が多いと書いてあるのを見たのですが、それはどういう理由で豊岡から出ていっておられるのかご存じでしょうか。

座長 全くわかりません。ホームページの掲載記事がフェイスブック上に出回っているようです。最近、毎年朝来市に移住してくる人の数が増えてきおり、その多くは県内だけれども、神戸などではなくて、中心は豊岡市や養父市などが中心になっているという、そういうデータを取っているとい

う話です。しかし、朝来市から出た人がどうなのかはそこに書いてありません。差し引きがどうなのか見えないと、意味のある数字なのか分かりません。また、朝来市のどのような年齢層の人が動いたのかは、朝来市自体を分析しないことにはわかりません。

委員B 資料3のKPIの但馬空港助成利用件数で、2018年度に3,530人に増えているのは、今のATR42-600の就航によって、大幅に搭乗可能数が増えたので、それだけ見て増えたとの判断はできないのではないかと思います。

副座長 但馬空港の利用者が増えるほうが望ましいのは違いないのですが、但馬で空港を利用しないといけないようなビジネスの盛り上がり方は何を想定しているのですか。どんな人がビジネスで飛行機利用をされているのでしょうか。

委員C 劇団員にはできるだけ飛行機で移動するように言っていますし、やはり東京から来る方は飛行機を使います。市内の方の利用者数が伸びてないだけで、全体はたぶん相当伸びている。満席でチケットが取れない日もあります。

座長 ビジネス利用でどこまで伸びる可能性があるのか、どの分野になるのかは、なかなか言いづらいですね。ただ、仕事上で東京へ頻繁に行き来する方々は、体が楽です。例えば靴業界の方など東京に売りに行かれる仕事の方だと思います。他には平田さんのように世界中を飛び回る人。夕方便に乗って羽田に着くと、羽田に8時半頃に着いて、ラウンジでシャワーを浴びて夕食をして、夜中にヨーロッパに飛ぶなどがあります。海外を行き来するのにすごく便利で東京乗り継ぎ便が増えている気がします。

では、地方創生戦略第5版の策定について、事務局から説明をお願いします。

(2) 地方創生総合戦略第5版の策定について

政策調整課と健康増進課から資料6、資料7、資料8に基づき説明

ワークイノベーション推進室から資料9に基づき説明

大交流課から資料10に基づき説明

座長 ワークイノベーションの場合は、若い人は帰ってこない、特に女性が帰ってこない、その取り組みをしないと、この人口減少のトレンドを変え

ることはできないという非常に強い危機感からきています。

それから、演劇のまちは、突き抜けた価値を作り上げていかないと人口減少の緩和はできない。東京が相対的に魅力を増している。毎年地方から10万人以上の若い人が東京に吸い取られている実態がありますので、突き抜けたものを作っていかなければならない。その推進力として演劇のまちをつくるという説明でした。

2020年度から第2期の総合戦略を策定し、引き続き地方創生に取り組んでいきたいと考えていますが、この第5版と関係がございます。説明が長くなって恐縮ですが、第2期地方創生総合戦略の考え方やスケジュールについて説明させていただいた後、一括して皆さんと意見交換をさせていただきたいと思います。

(3) 第2期地方創生総合戦略策定について

政策調整課から資料11に基づき説明

座長 それでは自由にご質問、ご発言いただきたいと思います。

副座長 専門職大学が設立されることになり、状況が変わります。スタッフだけでも数十人規模で入ってこられる。そして、毎年80名ずつ学生が増えてくる。そのことは社会増のかたちやタイミングを変えてきます。18歳人口の流出がずいぶん小さく見えるようになる。今、10代の大きな流出に対して20代のUターンという、この比を回復率として取っており、その水準をわかりやすい大きな目安として使用していますが、20代前半のUターンで帰ってくる方に対し、逆に専門職大学から卒業する学生たちも多くあります。

そのため、80人ぐらいの学生が、中からどれぐらい、外からどれぐらい入ってくるのか、その中で卒業したタイミングでどれぐらいが豊岡もしくは但馬にそのまま残ってくれそうか、どれぐらいを純粹に外へ出すことになりそうか、これぐらいなどと考慮した上での目標設定とするほうが、従来の目標のままいくよりも適切ではないかということです。

座長 今の予定では、実際に専門職大学ができるのが2021年。戦略は2020年度からですけれども、目標をたてて実際に大学が動いてからなのか、もしくは、実態を見て変えるほうがいいというご提案なのか、あらかじめ見越した上で2020年度からやるべきだということなのか。しかも、大学の場合、2021年、2022年、2023年、2024年の4年間で全学生数となります。その辺いかがでしょうか。

副座長 実際導入が決まっており、若者が入ってきて、若者の人口動態や直接的な影響がこれから見えてくる。そのものが成果・効果ですので、それを織り込んだ上ですべて数字を作り直してしまうのではなくて、これまで何もしなかったらこんなにひどくなりますというシナリオは置いておき、さらにここから専門職大学ができた後のバリエーションとして、いくつか分かれていく可能性があります。例えばもう1つシナリオを入れたり、2つの柱とおいている回復率の問題と出生率の問題の文言や数値の全体の出し方をちょっと変えたり、もしくは、3つ目にするなどが必要であると思います。

委員D 観光は城崎などにそのまま残ってくれる可能性もあるかもしれませんが、演劇は、卒業したら出ていってしまう可能性も高いと思います。観光と演劇の比率はどれぐらいなのでしょう。

委員C まず、全体としての話です。そもそも定員80人が来るのかですが、これについてはマーケティングもしておりまして、全国から相当数の学生が来ると考えております。先日、香美町で専門職大学の説明会があったのですが、入学希望者で福岡から親子でいらっしゃった方がありました。演劇部は全国に2,000ありますので、そのうちの1割の200の演劇部のトップの子たちが推薦枠でいらっしゃったとしても、推薦枠だけで200人の志願者がある。また、福知山公立大学は公立化したことによって非常に高い倍率を示しております。専門職大学もおそらく相当の倍率になるだろうと考えております。それをまず前提として、その上で、だいたいの比率を想定すれば、但馬圏域から3割、但馬圏外から7割くらいの比率になればいいと思いますが、福知山公立大学や鳥取環境大学は、地元からの率が低いので、実際はそれよりも地元の進学率は低くなると考えています。公立大学なので指定校推薦はできませんし、試験を行います。留学生も含めて7割が但馬圏外から来る計算です。さらに、そのうちのどれくらいが残るかですが、インターン先でどれほど魅力があるか、さらに、但馬・豊岡の魅力をどれほど示していただけるかにかかっています。想定は3割残ってくれるといいかなと思っています。今までは0だったところに60人くらいが外から来て、相当優秀な子たちの3割くらいが残る。偏差値で言いますと岡山大・鳥取大とほぼ同じレベルの偏差値を想定しています。

英語も十分にできますし、韓国語・中国語もできるような子たち。それから、留学生が非常に優秀で、特にアジアのトップの大学から来ます。その子たちがどれだけ残ってくれるのかが、まさに豊岡市の勝負だと思っています。

日本では観光は国土交通省、文化は文化庁、文部科学省という縦割りで、全く連携できていないのですが、アジアの諸外国、例えば韓国は観光文化スポーツ省というように一体型の政策をしています。ここを担える人材がいないので、まさにこの観光と文化を橋渡しできる、マネジメントできる人材を育成するというのがいちばんの趣旨です。その雇用が豊岡、あるいは但馬圏域で開けていけば、まさに政策と教育が一体化できるようになる。理想としてはそうですが、そこまでうまくいくかはわかりません。

もう1つ、人口動態のことで言いますと、ぜひ皆さんに「完成年度」という言葉を覚えていただきたい。これは、専門職大学の申請に向かって兵庫県庁の準備室で一所懸命に文科省へ提出する書類を作成します。10月に申請し、来年の8月に認可となります。卒業生を出すまでの4年間はこの内容はいじれませんが、卒業生を出した後は、ほぼ届出に近いかたちで定員を増やしたり、学科を再編したりすることができるので、そこからもう一段、戦略的に豊岡、あるいは3市2町が一体となって、どういうまちをつくりたいからどういう大学にするのかを話し合う機会がもう1回あると、頭の片隅に置いておいていただきたい。1学年80人定員ですが増やせる可能性もあります。

山梨県に都留文科大学という、教員養成で定評のある大学があります。30,000人から35,000人の人口のまちですが、市民の10分の1が大学生です。関東で教育をやりたい優秀な学生が集まっています。そういう特色を作れば全国から学生が集まってくるので、大学がそのまちの1つの基幹産業にまでなります。そういったところも含めて今後戦略の中に組み込んでいく必要があるかなと思います。

委員E 今の取り組みはすごくいいと思っています。なかなか成果がわからないのですが、内容は十分濃いと思っています。大学にしてもそうですし、芸術も文化も「本と温泉」など、それぞれの取り組みのクオリティが高い。そういう意味では、新しい芽はいっぱいある。ひょっとしたら、それをまだうまく伝えきれていないのではないかという気がします。成果や数などを追い求めるよりは、もう少し「こんなにいいことをやっているよ」と肩の力を抜いて上手に自慢するほうがいいのではないかと思います。中身自体は、すでに他の都市よりも大きく進んでいる。しかし、一方で全部を真面目にしようとしすぎていてのではないかという気がします。

もちろん女性も活躍してもらいたいですが、どちらかという与企业勤め、会社勤めをベースに議論されている気がします。企業勤めも大切ですが、きちんとした商売、あるいは起業するまでにはいかなくても、夫婦や自分で何かするなど、そういう暮らし方をされている人が増えるほうが魅力的だと感

じます。多様な働き方や暮らし方をイメージしたほうが、対都会に対して、優位性があります。こんなことをしたいと思った人が気軽にできることが大切だと思います。

それから、外国人が増えてほしいと思っています。最初にあったように、豊岡は増えても他の周辺の人口が減ったらだめで、もっと言えば、日本全国を考えたら、豊岡だけが増えても日本の人口が増えなかったらあまり意味がない。やはり外国人が住まないと根本的な解決にはならないのではないかと考えています。観光のお客さんで日本人を増やしたいけれども、日本人は増えないから、どうしても海外の人で埋めることと同じように、日本の人口は減ってくるので、どんなきっかけでもいいのですが、海外の人も楽しそうに暮らしている姿も描ければ非常にいいと思います。

座長 議論を進める前に中嶋先生の最初のご指摘に戻りたいのですが、専門職大学ができて、演劇祭が動き始めますので、次の戦略の中での手段、その手段によって、さらにどういう結果、どういう状態を目指すのが大切になると思います。

専門職大学で4年間過ごした後に、仮に1人も残らなかったとした場合、若者回復率がどのくらい変わるかという試算をしたことがあります。仮に20%残るとすると、かなりの成果が出ていますので、ご指摘のあったことも含めながら人口ビジョンを見直していく必要があると思います。

それから、余談になりますが、実はこの専門職大学の誘致のときにいちばん効果的だったのはこのプランです。豊岡市と但馬全体の10代で減って20代で帰ってくる数字を知事・副知事にお見せして、ここが残された課題なのだ。女性のほうが帰ってきていない。演劇の大学は女性のほうが多くなる可能性があるので、そのことに「意味があります」と言って、そこから突破口が開きました。この戦略自体が専門職大学の誘致にかなり効いていたということは報告しておきたいです。

もう1点、ワークイノベーションの場合には、会社の中でのことを中心に話をしていますが、もともとワークイノベーション戦略の中には、ヒエラルキーの中で男性・女性にかかわらず、自分で作ればいいということが入っており、若者とか女性の起業をどう支援するかも入っていますので、ご指摘の点の問題意識は同じだと思っています。

委員F 本当にいろいろなことがゆっくりと変わってきていることを実感しています。移住された方やUターンされた方は、すごく熱意を持った方が多いです。その方たちは働き方よりも、自分たちのまちの楽しみ方や暮らし方を考

えながら、豊岡を楽しんでいらっしやいます。

移住された河合美智子さんをご一緒したときに「豊岡に住んで半年だけでも、やっと市民になれました。嬉しいです。一片の悔いもなかったです。よかった。」とおっしゃっていました。「何がよかったですか」と聞くと、「人と人が近い、優しい、とにかく楽しい。何が楽しいと言われてもわからない」と、さらに「初めて歌舞伎を見たのが永楽館、落語を見たのも豊岡で、こんなに刺激的な生活はない」とおっしゃっていました。

また、青年団の方も、感性豊かな方で、「雨が大好きなの、私」とおっしゃいました。豊岡の欠点というと、雨がなくて夏は暑くて、冬は雪が多い。豊岡市民が嘆いているのに、「雨が素敵なのよ。本当にこんなに雨が降り多ところは素敵」とおっしゃっていただいて、そんな方がすごく増えてきたと思います。

移住された方に、豊岡市の地区にはいろんな役が回ってくるし、日役があったりすることをお話ししました。私の妻が初めて地区の婦人会に入り、老人会で婦人部の活動として、朝の9時から3時までお茶出しをしていた。これはもうおかしいと婦人会の中でも話があったようですが、お茶出しがなくなると婦人会の仕事がなくなるので、続けざるを得ないという結論に至ったということでした。このように、やはり地区の中で、ジェンダーの問題がかなり根深く残っているところがあると思いますので、豊岡市として何か施策を講じていただかないと、女性が住みにくいことがずっと続いていく可能性があると思います。

もう一つは、ご主人の転職で豊岡にIターンされた奥さんがすぐにトレーニングセンターに入られ、鞆屋さんに就職して、マザーズリュックを作られました。きっかけは社長から「やってみないか」と声をかけられたことでした。プレゼンも何もやったことがない方がプレゼンをして、デザインも一から立ち上げて、かなり人気が高い製品となっています。出石で着物屋をされている方も、出石をもう一度着物のまちにしたいと、一所懸命がんばっておられます。このように女性が輝いている職場でモデルケースが生まれつつあります。ジェンダーの問題の中ですごくいい前例だと思いますので、どんどん発信していただければと思います。

保育士が足りないと聞きますが、今、保育園・認定こども園・幼稚園では英語遊び保育をしています。保育士さんに手伝っていただくと、子どもたちの目が変わるので、保育士さんが指導するのがよいと思います。また、演劇を学習された方が保育士の資格も取って現場に出られたら、すごく感性豊かな子どもたちが育つのではないかと思います。

ワークイノベーション推進室

今年度は、事業所向けにワークイノベーション戦略を市がサポートしながら進めます。いろいろな課題が出てくると思いますので、そのあたりを見ながら 2020 年度にジェンダーギャップの解消について、地域や家庭のジェンダーギャップをどう解消していくのかという戦略を作っていきたいと思えます。それに向けて今年度、アドバイザー、専門家にも入っていただき、必要であれば意識調査、ヒアリングをしながら、準備を進めていきたいと考えております。

男性が外で稼いで女性が家で家事・育児というのは、昭和に始まったスタイルで、男性が外で働いているという視点では、戦後のスタイルです。今の時代は令和ですので、社会のありようがどんどん変化している。一方で少し時代が変わったので、皆さんの活躍は認めつつも時代の変化に合わせる。例えば 70 代・80 代の高齢の方はその当時の価値観が染みついているので、なかなかその人たちに変われというのは難しいですが、せめてその行動を容認するというアプローチをしたいと考えています。そういった検討を踏まえてジェンダーギャップの解消戦略を作っていきたいと思っております。

委員G 私自身がそうだったのですが、大学進学の際に住民票の移動をする必要がなかったので移動していません。その後も豊岡市に置いたまま 3 回引っ越しています。専門職大学に入ってきていただくと同時に住民票を移さざるを得ないとか、移したら何か特典があるようにすればみんなが移して、そのまま面倒だからそこに住んじゃえとなるのではないかと考えています。

委員C その点については、初年次教育をしっかりします。その時に、住民票を移さないで地方行政、選挙に参加できないので、大学教育として住民票を移さないで指導する予定になっています。

委員G 豊岡市に縁結びの制度ができたと思いますが、私はここ 5 年で、夏休みのリゾートバイトに来た女の子を地元の男の子とくっつけて、3 組カップルを成立させて住ませました。観光協会はリゾートバイトとか、派遣社員を雇用しています。うちでは、7・8・9 月の 3 ヶ月で雇うなど、20 人くらいですが、その時に「彼氏がほしいです」という話が出てきて、ちょっと会ってみたらとしています。一つの突破口として、旅館の方に縁結びになっていただければ、いい出会いがあるのではないかと考えています。

もう 1 つ、観光業を視野に豊岡はがんばっていかうとされていますが、こども園では、今、土曜日も受けていただいています、日曜日もなんとかサ

ポート体制がほしいと思っています。その代わり、もちろん平日の丸1日は、家で見る状況にさせていただきます。現在、土曜日の夕食時間は、子どもを見てやることができないので、近所のおばあちゃんに来てもらって夕食を作ってもらっていますので、何かサポートを考えていただきたいなと思います。

教育委員会事務局職員

まず保育園については、1箇所だけ、城崎認定こども園が日曜日も預かっていると思いますが、それ以外は全部日曜日はお休みです。そういったご要望があることは心に置いていきたいと思っています。開所時間等については、今後検討していきたいと思っています。

委員H

豊岡も変わろうとしています。ママとパパも考え方をえようとしているし、でもまだそれが変わりきれていないので、いろんな摩擦があると思います。例えば去年、女性の働き方についてのセミナーに参加され、その後、就職された方がたくさんいらっしゃいます。事業に参加されたお母さんたちから「市が私たちのためにこんなことを考えてくれるなんて」と喜んでいる方が多くありました。その様子を見て、今までそういうかたちで在宅のお母さんたちに日が当たる部分が少なかったのだと思いました。

しかし、その一方で、女性だから、男性だからということではなく、母として我が子のいろんな姿、我が子の成長を見届けたい、でも働きたいという気持ちがあり、ママたちは迷いながら、自分はどうありたいかを考えておられます。

以前、あるパパが、親父は、家のことなんかほとんどせず、子育てもほとんどしなかった。そういう親父の姿がパパの姿だと思っていたけど、今自分はそれではダメだと思っている、とおっしゃっていました。自分が父親としてどうなのかというとき、ロールモデルが身近に少ないので、模索しているとおっしゃっていました。子育てをしながら起業しているママの話では、できるのだというモデルを示すことができたと思っています。

今、パパもママも悩んでいるし、迷われています。自分のしたいことがもつと出せたり、言えたり、それでもいいんだと、そういう風土が根付こうとしている今の時期が大切だと思います。

委員C

地区のジェンダーについてはすぐにやったほうがいいと思います。劇団員たちが移住してきますし、教職員が全員移住してきます。少なくともまず紙1枚でもこういうところを変えませんかとか、これではだめですよとか。

これはいろんなところで言ってきたことですが、うちの母は秋田の出身で

すが、大学の教員をしていました。田舎が大好きで毎年2、3回戻っていたのですが、親の法事には絶対に帰りませんでした。それは家事をさせられるからです。男だけずっと騒いでいる。そんなところにIJターンどころか、Uターンだって来ませんよ。それを見ているから帰ってこないのです。

会社からではないと思います。家庭と地域を変えないと。市が変えましようと言っている姿勢は、少なくとも子どもや若者、若い女性たちに見せないといけない。そこが根本だと思います。前も言いましたが、女性だけにお茶くみをさせる地区には補助金は出せないと、政策要請するぐらい。

もう1つは、観光のことで。昨日、ある旅行会社の方の話を聞きました。秋田の小さなまちで、観光のアイテムが全くなく、今ウォーキングがはやりのので、地域の方たちと開発し、商品化しようと言われました。ウォーキングだけでは来ないので、秋田犬に引っ張って行ってもらうと秋田美人に会えるというポスターを作られました。それで増えたのですかと聞いたら、1,000人だったのが1,500人になったとのことでした。これは、500人増えたが、たぶんUターン者を30人ぐらい失ったのではないかと思います。ジェンダーとか、性的なものを商品化することに批判がなかったのですかと言ったら、批判もあったけれども、住民の方たちからの提案を私たちは活かしたと、某旅行会社が言っていました。僕はすごく怒ったのですが、写真を見せてもらうと、その会議は男性しか出ていませんでした。

まず、マーケティング戦略としてもおかしいです。ウォーキングに来る方は、女性か夫婦で来るので、男性1人で来ることがないので、秋田美人なんて会いたくないんです。観光客がたとえ5,000人や10,000人増えても、Uターン者50人失っちゃったら全く意味がないと思うのです。

これは行政が文言にしにくいと思うのですが、イメージを共有することは大事です。豊岡からは、関関同立の大学に入る子たちが多いのですが、その子たちは特に女性が彼氏ができたときに、その旅行パンフレットを見せられるかというのは大きなポイントだと思います。うちの城崎・豊岡がこういうのをやっているから夏休みにうちのふるさとに来ない？というふうには。

秋田犬と秋田美人じゃ、秋田から仙台や東京に行った子は、絶対にそんなまちのことを誇りにしないし、宣伝しないし、恥ずかしいので隠します。若者たちが自分の出生地のことを隠すようなまちではダメだと思う。

そこを全部の基準にして決めていけばいいと思うのです。そこでイメージを共有できれば、戦略というのは自ずと生まれてくるかなと。観光も全く同じだと思います。ただお客さんが増えればいいということではないので。

座長

ちなみに、委員のお住いの婦人会はよく残っているほうですね。但馬でも

豊岡でも、かなりのところで婦人会はなくなってしまった。

委員C 先日、市内すべてのPTAの会長さんに説明する機会があったのですが、全員が男性だったことに驚きました。これは東京ではあり得ない。ただ、そこは難しいですね。今、男性が唯一教育に参加できるのはPTAなのかもしれないので、変えないほうがいいのかもかもしれませんが。でも本当にPTA会長は男性がやるものということが今でもあるのだなど、それは本当に驚きました。

委員D 週末に高校の学園祭があり、そこで娘の班がネオ日本診断というものを行っていました。「あなたは世界の常識についていけますか」という質問で、ネオ日本診断度が100%・70%・50%・20%と分かれます。男女半数の50人弱でしたが、女性への質問では、「管理職を受けますか」という質問があり、それをYesにしたら「あなたの単身赴任はありますか」となり、さらにYesにすると100%になります。その選択しか100%にならないのですが、それが女性で4人、男性では1人だけだったと聞きました。なぜこのようなことをしたのかですが、修学旅行で行ったオーストラリアのお札が女性のほうが多く、調べてみると、歴代の総理大臣や政治家は女性のほうが多いので、日本とずいぶん違うことに気づいたことがきっかけだったようです。

これを見ると、女性は本当に社会に出ようとする気持ちがあって、企業も変わろうとしている。家庭や地域がまだ遅れていることを実感しています。

委員I ジェンダーギャップはすごく難しい問題だと思います。先ほどのお茶くみの話でも、なんで女性だけがやらないといけないのか、それは誰がやってもいいのではないかという部分もちろんあります。しかし、女性だからとか、女性も男性も同じように活躍しましょうという言い切りは、ちょっと難しい部分があるのかなと思いました。

資料には、男女格差があって、平均収入の額に開きがありますが、私も仕事をさせていただいていますけれども、やはり子育てが忙しく、正社員にはなれない、空いた時間を使って少しでも仕事をしてみたい、現場に居たいという気持ちがある一方で、やはり夕方家に帰って、子どもたちの言動を自分の目で見て、自分でやりたいという気持ちもあります。その部分からみれば、正社員ではない道を選んでいるお母さん方も多く、その結果が平均収入の額の格差に出ていると思います。

女性が働き、女性の管理職を増やしていくことは、もちろん増やしていったほうがいいですが、「管理職になろうね」とか、「あなた管理職になりなさい」などではなくて、会社にがんばっている女性が多くいて、それを見て「あ

んなふうにも輝いて働きたい」と思える状況を作れば、どんどん女性が輝く現場になっていくのではないかと思います。

市役所もそうですけれども、トップに立つ女性の方々を少しずつ増やしていただいて、それを見て働いていらっしゃる女性が「私もあんなふうになりたい」と自分から管理職やトップに立っていきたいと思える環境づくりは、すごく大切なことだと思います。このことは、もちろん市役所だけではなく、各企業の問題でもあります。各職場でそのような状況ができると、輝いて働く女性が増えていくと思います。

委員H 男性だから、女性だからではなく、自分がやりたいことができるかどうか大事だと思います。出産を機に退職された方で「働きたい、この仕事をぜひしたい」と思いをもつ女性が働くとなったときに、子どもの病気や保育園のお迎えについて、ご主人が会社に相談されたら、会社の上司がひと言、「奥さんが働くのをもう1年延ばしてもらったら」と言われて、その男性はその会社で何も言えなくなってしまったと聞きました。女性はかなり悔しい思いをされていました。自分が何をしたいか、それが男性だから、女性だからというのはなくて、お互いがしたいことについて話し合う、そのコミュニケーションも必要であると感じています。

副座長 難しい言葉がいろいろあり、本当にしっかりと皆さんが理解しておられるのか気になります。今この表紙だけでもワークイノベーション、リベラル、ジェンダー、ジェンダーギャップと出てくるのですが、特に私が違和感を持っているのは、リベラルという言葉です。ジェンダーや多様性という言葉とリベラルという言葉と並べて、スローガンにしているまじを見たことがないですし、それから、英語をしゃべるもので、このリベラルという言葉がしっかりと伝わっているか、そもそもここでの使い方が正しいのかと感じる部分があります。

ジェンダーの問題については、慎重さを求めたい部分があり、バランスを上手にとっていただきたいと思います。どこかの側面を強烈にやりすぎると、単にそれは男性のように働く女性を増やすだけになって、そのことは結局、結婚とか家庭の形成とか出産とか、UI リターンへ逆に働く可能性があります。家庭も地域も職場も、すべてつながっているこの社会の1つ1つの軸をちょっとずつ多様なまちづくりに向けて、一斉にクルッと少しずつ回さないといけないと思います。ある程度スピード感や力はそのに加えないといけないのですが、バランス感覚が重要になると思います。

それと、おそらく豊岡の中にいらして、この創生戦略についても関連事業

がいろいろありますが、評価する指標をお持ちでないの、どれぐらいすごいことか、自慢していいのか、わからない方が多いと思います。私は仕事柄いろんな自治体を見ておりますが、豊岡がやっていらっしゃることは、まだ具体的な成果は待たないといけません、相当自慢していただいていることだと思います。必要であれば自慢の仕方も材料を多く持ってきます。それから、当然メディアなどにも上手に何回も出て、内向きの情報発信をもう少し丁寧に、賢くやられたほうが良いと思います。今、外向きに「豊岡を知ってもらわなきゃ」の部分に力が入っていると思うのですが、親の背中を見て結局帰ってこないことが続いてしまうのではなく、やはり親たちが少しずつこのまちでいいんだということに満足し始めているし、経済・社会的な生活にその姿が表れているものを子どもたちが見れば、徐々に回復率が上がる、そのようなフィードバックもあると思います。

それから、突き抜けるという言葉ですが、これについては、一般的にこれぐらいでいいかなと思われているよりは、「おっとりっしや」を2乗ぐらいつけていただいたほうが良いと思います。たぶん、これぐらいでいいだろうなと思っていることでは、突き抜け方は全く足りていないので、本当にそんなことをこのまちがやるのかということをやって、全国的に国際的にいいぐらいだと思います。

それから、スピード感については、これぐらいのスピードでまちが変わっていいかなと思う2倍とか、少なくとも3割から5割ぐらいは加速していただく必要があると思います。こんなものでいいかなと言っていたら人口動態のほうに先に行ってしまいます。追い抜かれた後、向かい風の中で追いかけてようとすると、相当しんどいことになりますので、まだちょっと後ろから迫っているときに加速するのが最も良いと思います。

満足していいし、自慢もしていいと言っても、この創生戦略も5か年目に入り、少しこの枠組みの中でやることに慣れが出てきて、本当にこれでいいのか、これはどうやって効果に結びつけるのか、こだわりの部分が弱くなってきている印象も受けます。ただ、第2期に入りますので、もう1回0ベースでやるんだということで、ここでもう1回ギアを入れ直す。ただこれもバランスの問題があり、そのことによって役所の中での評価書面の数が増えていくとか、いくつものレイヤーがあり、市長に行くまでに時間と手間がかかりすぎて、自分の部署からの事業評価が最終的に終わらないとならないような注意が必要です。

もう1点、外国人についてですが、数字を見たところ、豊岡にいらっしゃる外国人の方が増えてきている印象を受けています。今、豊岡の総人口の約1%が外国人の方ですけれども、それが若い方で少しずつ増えてきています。

どういう方が、どういう目的で増えているのか、その影響は無視できないと思っています。私は神戸市のアドバイザーにもなっているのですが、神戸市の2大柱の1つに、2,500人の転出超過を防ごうというのがあります。24大学、7万人の学生がいる神戸市ですが、やはり就職のときに2,500人が転出超過になります。2,500人をなんとかするぞと言っていたら、東南アジアからここ5年連続で1,000人の日本語を勉強する学生が入ってきて、差し引きすると、転出超過が突然1,500人になります。その数字を見て喜んでおられるのですが、意味合いを考えてくださいと言っています。東南アジアから日本語を勉強する1,000人の学生が残って貢献してくれればいいですが、ただ1年後、2年後に帰ってしまうだけだと数字のマジックです。豊岡市は、まだ1%ですが、増えつつある外国人の方のこれからの状況を見たいと思います。

多様性については、男女の多様性によろしく取り組み始めたところですが、年齢の多様性もあるでしょうし、その先には社会や宗教や文化や言語などの多様性があります。外国人の方については、さらにハードルの高いものが増えてきつつあるので、ここに本格的に直面する前にしっかりやっておかないと、後で躓くことになると思います。

それから、住民票の話が出ていましたけれども、専門職大学では、入ってくる学生に対する配慮をされるということでしたが、できれば、豊岡市に住民票を移してもらったら、学生たちがこの限界でお得感があるような何かを出していただく、大開通りで学食があるとか、学割などを付けていただくとうれしいなと思います。

住民票の動きですが、出ていく側の動きが非常に鈍いです。21・22・23歳ぐらいで初めて正規社員の就職が決まり、会社にこのアパートから通勤しますと出さなければならないので、そこで一度に動きます。かといって、まちから離れていく人たちに、早く住民票を移動しなさいねとするわけにもいかず、ちょっとこの辺が悩ましいところです。これは豊岡市だけではなくありません。総務省が何年前に、外国人の方には住民票を出してくださいという変更が行われたので、外国人の方の把握がしやすくなりましたが、10代・20代の方の動きが住民票からは取れないことが非常に悩ましいところです。

座長

市では、特に外国人、外国籍の方について、今年度神戸大学と組んで、全数調査をやることになっています。それから、外国籍の方が働いている企業も、抽出ですが実態調査をした上でどうすべきか、次につなげるように準備しています。

それから、リベラルなという文言はあまり深い議論がなかったのですが、要は「多様性を受け入れる」ということの修飾語として使っています。多様だけれども1つのまちを構成するものとして、お互い支え合う、そういうまちをつくろうというときの形容詞としてリベラルという言葉がついている。政治的なリベラルを意識したわけではありません。

ジェンダーギャップの話は、例えば年齢のかなり高い人というのは、なかなか変わらないところもありますし、未だに保育所に対して、非常によくない気持ちを持っている人たちもあります。個々の話を始めると非常に難しいのですが、豊岡市のアプローチは、みんなが納得できるところから、「そうだよね」と言えるところからスタートしよう。実際この数字を見て、「女性は帰ってきていないですよ。これどうですか」と言うと、「それは大変だ」ということはわかっている。あるいは、企業のほうも圧倒的に人手不足で、昔だったら「やっぱり男だよな」とか言っていたのが、そんなことを言っていられない時代になっている。実際に活躍しているような女性も出始めている。その辺でみんなが「それはそうだよね。これはなんとかしないとイケないよね」という共通の危機感を持つところからスタートをしようとしていまして、あまり大上段の理念からは入っていません。現に女性の社員、市の女性職員のインタビューなどの結果を見ていくと、いろんなところで悔しい思いをしながら、断念をしていることがわかってきましたので、思いを強いるようなまちのありようや、社会のありようってどうでしょうね。あるいは、組織のありようってどうでしょうねというところから、これは公正って言えないのではないですかと、相手の顔色を見ながら、感情的な議論になって時間を無駄にすることがないように、かなり慎重にやりつつあります。ここをやらない限りは、この地方創生の人口減少の緩和は、かなり難しいだろうと考えています。

副座長 先ほどワークイノベーションの説明の際に、どれぐらい育児休暇が取れているのか、全国平均と比べると低いとあったのですが、全国平均の数値は非常にくせ者で、大都市の大企業の数字に引っ張られるので、小さな自治体の問題、それから、小さな自治体に多い中小企業の実態からすると、相当かけ離れてしまい、なかなかそんな簡単に全国平均の数値には、豊岡は今のままでは近づけないはずですよ。ですので、もう少し状況が似たような中小企業とか自治体で、うまくやれる方法を探すなり編み出すなりして、まち全体、まちぐるみで取り入れないとたぶん難しい。会社は非常に難しいと思います。

座長 あのグラフはむしろ、危機感を持ってもらうための資料です。少なくとも、

なんでこんなに女性が帰ってこないのかというときに、思い当たる節がありますよねという論理でもって示していく。中小企業にも、いろんな事情がありますので、そこを具体的にどう潰していくかの作業をしていく必要があると思っています。

委員J 私の娘は今大学6年生ですが、大学に出るときから子育てをするなら地元でと言っています。豊岡市は条件が整っていない部分があるかもしれませんが、大学生の娘が、子どもを育てるときには帰ってきたいと言ったことを考えると、豊岡のまちの教育、子育ての環境、子育ての良さを自分が受けてきた教育の中で感じていたのかなと思います。

大都市ではできない、豊岡市でないとできない周りを巻き込んだ温かい教育などで魅力的なまちを作ってください、人を取り込むようになってほしいと思います。他の市町の人口がマイナスになり、豊岡市がプラスになっても仕方がないので、豊岡市で子どもを産んで、子どもを育てていく、ゼロから増やしていく、そういう豊岡市であってほしいと思いながら話を聞かせていただきました。

委員A 私の娘は「豊岡が好きだけど、帰ってきても出会いがないしなあ。みんなそう言っている」とのことでした。詳しく聞いていませんが、これから大学生もたくさん来られて、豊岡の男性にあまり魅力がなかったら、女の子をみんなよそに持っていかれることもあるのではないかなと、ちょっと心配になります。

特に年配の男性は、やっぱりこうでないとアカンみたいな感じで育ってきた人が多いと思いますが、男性も女性も肩の力を抜いてやりたいことができるとか、弱みも見せていいんだよとか、活躍しなくてもいいんだよとか、真面目すぎるのではなく、肩の力が抜けている方が魅力があると思います。

昨日もおんぷの祭典で子育て世代の方が来られている様子を見て、ここ数年で大きく変化したと感じました。お店の方もそうだし、お店に来られる子ども連れの方も雰囲気が変わり、びっくりしました。フェイスブックなどを見ても、豊岡は最近ダントツだと思います。本当に自慢していいような取り組みがいっぱいあって、それがメディアでも多く発信されています。

一方で「豊かな暮らしを楽しんでいる市民の割合」が減っていることがすごく気になります。この雰囲気をいいなと思っているグループと、それが届いていないのか、面白くないと思っているのか、よくわかりませんが、何かギャップがあるのではないかと、そこに力を入れていかないと、みんなで幸せになるというまちになっていかないのではないかと思います。地方創生は、

人口減少対策ですが、底の部分でつながっている気がします。

委員K 日高では、劇団青年団で大変盛り上がっていますが、そうやって盛り上がっている方もいる反面、ちょっと一步引いたところから見る方もあるのが正直なところですよ。

実は来月、日高の夏まつりがあるのですが、そういった時に青年団の方と一緒に何かできないか、そういう時間が取れないかと働きかけています。劇団員の方も移住されてくるので、地域と一緒に何かすることで施策につながることもあると思います。私も今日の会議での説明や資料を見る中で、気づいたことがありましたので、いろんなかたちで、関わりをもちたいと考えています。

委員L 小さな世界都市を実現するために芸術文化を創造し発信するという路線でいけばいいと思うのですが、城崎はアートセンターがあって、観光への直接的な影響もあり、いい効果があると思います。日高では、駅前が盛り上がっています。豊岡地域には、専門職大学できます。もっといろんな話が出てこなければいけないのですが、経済界ではあまりその話を聞かないので、これからもう少しいろんなPRをされるなど、経済界も巻き込む必要があるのではないかと思います。演劇はよくわかりませんが、音楽家の方は決して裕福ではない、収入も高くない人が多くて、大変です。今回のおんぶの祭典も半分は市民の寄付ですが、上位の寄付者は製造業や建設業で、あまり演劇と直接的な利害関係がない人たちが寄付をされています。演劇も企業の支援などが必要になっていくと思います。芸術文化というのは昔から、ある程度裕福な人がお金を寄付したり、若い人を育てたりされているので、そういうことも必要なのではないかと思います。

委員C 私自身9月末に引っ越してまいりますと豊岡市民になるのですが、現在、毎週2、3回はどこかに行ってお説明に伺って、精一杯説明しているつもりですけども、必ず「うちには来てない」とおっしゃる方がいらっしゃいます。ただ、1つだけご理解いただきたいのは、やっていることはアートなので、究極のところでは形にして見せるまではたぶんご理解はいただけないと思っています。もし、最初から全員にご理解いただけることなんて、それは価値のないことです。その部分はぜひご理解いただきたいと思っています。中嶋先生の仕事とは真逆で、数字では表せないことをやっています。

そこをまずご理解いただきたいということと、私は教育行政に関わっているので、豊岡市内でもやはり貧困の問題、社会的分断の問題、ネグレクトに

近いようなご家庭もあり、その対策も含めて非認知スキルに取り組みます。これは事前分配です。将来の生活保護世帯とか、将来の失業者をなくすためには、貧困の連鎖を断ち切って、子どもたち全員が将来就職したり、結婚したい人はできるようにするというのが事前分配です。ここに今、力を入れています。少なくとも、豊岡市の教育政策、文化政策は本当に今日本一の水準にあると思います。だからIターン者も来る。もう来ない理由はなくなった。

あとはどうするかですが、これは最初の市長の話に戻るのですが、中嶋さんもお指摘された景気変動との関連が本当に強い。具体的には、阪大・神戸大・京大の文系の大学院進学率が極端に減っています。就職が決まった4年生の女子学生に2年後のその就職先があるかどうか、今の日本では保障できないので「優秀だから大学院に行け」とは言えません。

なので、ここはどんなに豊岡市ががんばっても無理という感じがあります。ただ、私の周りでもIターン、Jターンを本気で考えているのは子育て世代なので、こちらのほうをターゲットにしたほうが。そこに次の戦略でターゲットを絞られたほうが良いと思う。22歳で帰ってくるのをもうちょっと幅広く取るという選択もあるのではないかと思います。

座長

ありがとうございました。時間になりましたので、今日はこの辺にしたいと思います。本日は、次の戦略をどうするかというスタートですので、また皆さんとも議論させていただきたいと思います。それから、市民の皆さんとのやりとりや対話をどうするのか、スケジュールにはありませんでしたので、ここは一度検討したいと思います。

色々ご発言いただいた中に、豊岡の施策の良さが多くあり、一方で大きな課題が残っているということも間違いないので、実際の成果につながるような施策や事業に狙いを定めてやっていきたいと思っています。